福岡市

私幼だより

No. 88

2014年 はる号

1月25日　サッカー選手権大会にて

母親学級講座「言葉の発達と絵本」古相正美 氏
「子どもの心身の健康と食生活」
牛島達郎 氏

Event News　おやこフェスタ in 海の中道
教職員レクレーション大会が開催！

PTA大会 記念講演　「日本と世界から教育を考える」
池上　彰 氏
増田ユリヤ 氏

なるほど！

となりの園内研修!!

Vol. 3

高取幼稚園

究極の園内研修、ここに！？

一般社団法人 福岡市私立幼稚園連盟
URL　http://www.fyr.or.jp

■編集／広報委員会　■事務局／福岡市早良区西新7丁目13−1　福岡市私立幼稚園教育センター
■印刷／株式会社ペイジ　発行年月日　2014年3月14日　TEL (092) 822−0080　FAX (092) 822−0094

～柔軟さとしなやかさ～

福岡市私立幼稚園連盟　会長 柿迫　重正

何となく　今年は良い事あるごとし
元旦の朝　晴れて風なし

2014年の幕開けは、冷たい空気も清々しく、目映い金色の光に照らされた景色がキラキラ輝く穏やかな朝に始まりました。私事ですが、そんな元旦の朝、ゆっくり風呂につかっていると、ふっと、年末に買った宝くじの事を思い出しました。そうなるともう居ても立っても居られませんので、早速、新聞で当選番号をチェック。すると…な、なんと当たっている！間違いなく当たってる。やったーっ！と歓声をあげたところで目が覚めました。

さて皆様はどのような新年を迎えられましたか。今年のお正月は全国的に好天に恵まれ、各地の神社では例年より多くの参拝者で賑わったそうです。さて、2014年の午年はどんな年になるのでしょう。冒頭の句のように、元旦の朝が晴れていると「何となくいい事がありそうな一年の予感がする」と歌ったのは石川啄木ですが、絵馬にその願いを託すがごとく、連盟にとってすべてがウマくいく。Everything It's all right！になればと心から願っています。

しかし、現実はそう甘いものではありません。いよいよ来年に迫った子ども子育て支援新制度への対応が、否が応でも求められるのが今年なのです。ご承知のとおり、新制度移行後は私学助成を受ける幼稚園、そして施設給付を受ける幼稚園、さらに認定こども園に移行する幼稚園に大別され、どの道を選択するかによって助成のあり方はもちろん、県や市との関わり方も変わって参ります。

つまり新制度とは私が思うに、我々が今まで見たことも経験したことのない目前に迫った黒船のような存在なのです。黒船といえば「たった四杯で夜も眠れず…」ですが、眠れぬどころか、冒頭の宝くじとは逆に「夢なら早く覚めて欲しい」と思うのが本音です。

しかし、すでに賽は投げられました。これからの連盟は会員園の形態に左右されないしなやかで柔軟な組織力を持たなければなりません。会員園の皆様が選択する道はそれぞれでも、皆様の園に通う子ども達すべての最善の利益をもたらすためのフレキシブルな対応が必要となります。口で言うのは簡単なのは百も承知しておりますが、決して諦めてはいけません。何故なら投げられたのは賽であって匙ではないのですから。

今まで脈々と受け継がれてきた連盟の歴史を継承すべく今一度、連盟の活動に対する大いなるご理解とご協力、そして加盟園120園の結束を切に願い新しい年の挨拶と致します。

幼稚園連盟のホームページをご覧ください

バックナンバー検索も！

私幼だよりのPDFデータがダウンロードできます

福岡市私立幼稚園連盟　検索

平成25年10月1日、テレビ西日本（TNCももち浜ストアプラス）にて、幼稚園教諭3名が平成26年度私立幼稚園入園案内のPRでテレビ生中継出演しました。

今年度も引き続き テレビ出演しました！

▶本番生放送！
右から
木村　光裕先生（ときわ幼稚園）
藤野　礼先生（別府団地幼稚園）
上野　富美代先生（あすなろ幼稚園）

平成26年度の幼稚園入園願書の配布を開始いたしました。幼稚園は、園によってさまざまな特徴があります。お子様と一緒に、幼稚園へ見学に行って幼稚園選びをしませんか？現在、ほとんどの幼稚園が通常の保育終了後に、夕方までお子様をお預かりしている「預かり保育」を行っております。願書受付は11月1日からです。詳しくは、ご検討中の幼稚園、又は幼稚園連盟までお問い合わせください。皆様のご来園楽しみにしております！

福岡市私立幼稚園振興大会

■ 記念講演
「人と自分を大切にする食」
講師：佐藤　剛史 氏

日時：平成25(2013)年11月22日(金)
17:30～20:30
場所：グランドハイアット・福岡
3F　ザ・グランド・ボールルーム
来賓総数：20名　出席：104園　380名

去る、11月22日、福岡市私立幼稚園振興大会2013が、グランドハイアット・福岡で行われた。

髙島宗一郎市長はじめ私学振興にご尽力を下さっている県議会議員・市議会議員の先生方をお招きし、幼児教育の環境向上として、預かり保育に対する助成の拡充と保護者の経済的負担軽減に繋がる幼児教育の無償化を陳情した。

記念講演として、九州大学大学院農学研究院の助教として教壇に立つかたわら、食育や婚学、また専門書など多数の著書の執筆、講演活動に活躍されている佐藤剛史氏をお招きして講演していただいた。

冒頭に現大学生のデータに基づく食の乱れの話があった。先生が受け持つ農学部大学院生で難しいレポートをしっかり書ける学生が、朝食に「おにぎりとブラックサンダー（チョコレート菓子）」という目を細めたくなる食生活の状況報告があった。

ファストフードやコンビニエンスストアが繁盛する現状で、学生が旬の素材で料理を作って食事を楽しむ日々は難しい事なのか…その学生たちが、いずれ食事の準備すら大変になる多忙な社会人になり、いずれ親となっていく。

また、非行を続ける未成年の多くが、家庭の食卓に愛情を感じられない現状があり、時に子どもが食事を親に頼んでも親が面倒くさそうな態度をとったりする悲しい事実。ならば、なぜ子どもを産んだのかという疑問が湧いてくる。

先生は親から子どもたちに「君たちは仕事よりも何よりも大事だよ！愛しているよ！」というメッセージを日常的に伝えて欲しいと言われた。子どもたちが「生まれてきてよかった！」と自己肯定感を養えるように、そのためには日々の愛情溢れる食卓がとても大切だと。

自分の子どもといったいあと何回食卓を囲むことができるのか？あと何回一緒にお風呂に入ることができるのか？そんなことを考えると子どもと過ごす時間が愛おしく感じられる。そんなカウントダウンが既に始まっているから、今を大切にしなければならないことを考えよう。

小学校での『弁当の日』。『食事を作るってかっこいい！食べることって素敵だ！』から始まったこの活動。子ども達が自力で弁当を作る日。朝一、弁当の見せ合いっこをするらしい。はじめは、本当に自力で作ったのかを確認しあうところから始まる。

笑顔とカラフルなお弁当写真の数々の紹介。低学年の子どもが高学年のお弁当を羨ましそうにのぞき込む写真。次の写真は、その低学年の子どもが高学年になっていて、新しい低学年にお弁当をのぞき込まれている様子。そこには、子どもたちの成長と共に習得する食への関心と生きることの喜びを獲得している姿があった。

この講演を聞かせていただき食の大切さを実感し、自分や家族の食生活を見直すきっかけになった。

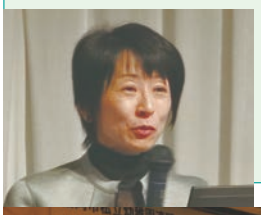
（※広報委員）

子どもたちが作ったお弁当

福岡市私立幼稚園連盟PTA大会

■ 記念講演
「日本と世界から教育を考える」
講師：池上　彰 氏
増田　ユリヤ 氏

日時：平成26(2014)年2月6日(木)
10:30～12:30
場所：ソラリア西鉄ホテル 8階 彩雲
来賓総数：18名　出席：80園　425名



平成26年2月6日、福岡市私立幼稚園連盟PTA大会が、ソラリア西鉄ホテルで行われた。

第一部大会では、福岡市私立幼稚園連盟会長及びPTA連合会会長の挨拶があった。

PTA連合会会長の丸山貴裕氏は、幼稚園保護者代表として大切な幼児教育を担う幼稚園へ感謝の意を述べられ、子育て支援や就園奨励費や第3子優遇事業などの公費助成を日頃から働きかけてくださっている来賓議員に御礼を述べた。

第二部は、元NHKニュース番組司会者の池上彰氏と教育ジャーナリストの増田ユリヤ氏、御二人を講師に迎え講演会があった。

講演では、先進国の教育の現地報告を見聞することによって日本の教育を客観的に考えることができた。

21世紀、世界では、どのような学力が求められているのだろうか。先進国では、受け身の学力から自分の頭で考えていく力が求められている。

例えば、フィンランドでは小学校の時から、原子力発電のリスクマネージメントの話し合いを授業の中で行ったりする。いじめ問題でいうと、子ども達が居心地の良い学校環境を作るにはどうしたらよいか話し合い、居心地の良い環境では、いじめはあってはいけないと子ども達が自ら答えにたどり着く。

フランスでは人権ぐるみの問題対処を初等教育から行っている。いじめ問題を子どもの人権から考え、子ども自ら人権を理解させて、問題があるときは第三者に相談できるようになるまで丁寧に子ども達と関わっている。

アメリカのある学校では、子どもがデモクラシーの意味を理解し行動できるようになる教育を行っている。校訓は『大学に行って、世界を変えよう！』で驚かされる。

自分のより良き人生を選択できるようにするための政策を打ち出してくれるのはどの候補だろうか？という観点で政治に関心を持つようにさせる教育。「わたしの一票で世の中を変えることができる」と自信を持っていればほんとに変わっていくことを知ることができる。このように子どもが政治や未来に夢を持つことが教育の成果と考える。

日本の初等・中等教育の基礎学力は世界でも上位に位置するが、大学に入るとその順位を下げる。その理由として、大学に進学することが学業の終着になっていることが多いのではないか。通過点である大学では、そこで何を勉強して将来の仕事に役立てるか、どうやって社会貢献するかを自分の事として考えてほしい。

日本の教育はなんでも与えられすぎてはいないだろうか？自ら何かを掴む力が弱くなっていないだろうか？

「どうせ自分の一票で世の中は変わらない」というような大人にならないためにも、子どもの教育は一番大切なものであるとお話をして頂いた。

（※広報委員）

母親学級講座

第2回

「言葉の発達と絵本」

講師：中村学園大学院教授
古相　正美 氏

日時：平成25(2013)年9月6日(金)
10:30～12:00
場所：私立幼稚園教育センター
出席：31園　88名

古相先生は、自分の6人のお子様を通して、身近に細やかに〝言葉の発達と絵本の関連性〟を見てきておられ、0歳から小学生高学年までの様子を分かりやすく話された。

「赤ちゃんの子育て時の母親は、慢性睡眠不足状態ですよね。」など、母親の子育ての大変さもよく解っておられ、お母さん達と共感し合うことが多く、氏と受講者の距離感も、とても近いものだった。メモを取りながら真剣に聞きながらも、氏が自分の子供の絵本に対する反応を語られる時は、「うんうん、そうそう！」と頷いたり「へえー…」と感心したり、笑いもあったりで、会場は和やかな雰囲気だった。

何十冊もの絵本を持ってきておられ、『だるまさんが』『ミフィー』『色々～』『へんなところ』『かおかおどんなかお』『ねないこだれだ』『はらぺこあおむし』『たべてあげる』『ちいさいおうち』など、読み聞かせを交えながら紹介された。

「読み聞かせで言葉が入っていく。想像力が身に付く。生きていく上で、豊かな人生が送れる。大人になってからの生きる力になる。」など、たくさんの示唆をいただいた。

最後に、「図書館も利用するといいでしょう。」と、気軽にたくさんの絵本に触れることを勧めて講義を結ばれた。

古相先生のお話を聞いて

箱崎幼稚園 保護者　宮崎真由美さん

「絵本の読み聞かせは、子どもだけでなく読んでいる母親にも癒しがあるんですよ。」と言われ、心が温まる思いでした。6人のお子様に恵まれたイクメン先生で、育児の大変さをよく理解されておられ、その年齢に応じた子どもの発達に対する見方考え方をお聞きし、先生としても父親としても尊敬してしまいました。

私も、長男を出産した頃、近所に親族もおらず、泣いている我が子と二人きりの長い時間～。独りだけの育児の辛さを思い出すと切なくなります。

0歳から始まる言葉の獲得には、直接的なコミュニケーションが必要で、DVDやCDなどは一方的で、赤ちゃんには入っていかないそうです。赤ちゃんの反応がないようでも絵本を開いて指しながら語りかけると、喜んでくるそうです。声掛けが言葉の獲得に大きな効果があるということでした。生後1か月の赤ちゃんでも色に対する興味があり、暖色系の色がよく見えているということには驚きました。

「推薦書でなくても、母親が好きな本は何でも読んでいいんですよ。」など、押し付けもなかったので、素直な気持ちでお話を聞くことができました。

「子どもが読み聞かせをして欲しがる時は、内容を覚えていても、何度も同じ本を繰り返し読んで欲しい。」と話されました。親としては4回程読むと飽きると思うんですが、その子どもの気持ちに応えることで、豊かな心を育んでいくことになるそうです。

TVやゲームは受け身なので、想像力は身につかないそうです。家事が終わらない時など、長時間TVやDVDの視聴をさせてしまった事を今更ながら反省します。先生のお話を聞きながら、もっとたくさんの絵本を読んであげればよかったと反省しました。

なんとか母親が楽になり、多くの本を読み聞かせることができれば、絵本と言葉のもつ力が子供たちの心に響いて、強くて優しい大人に成長させることができるんだということを学ばせて頂いたような気がします。

第5回

「子どもの健やかな成長を願って
－子どもの心身の健康と食生活－」

講師：元・福岡女学院大学教授
牛島　達郎 氏

日時：平成26(2014)年1月17日(金)
10:30～12:00
場所：私立幼稚園教育センター
出席：28園　80名

『生活習慣を正し、自尊の感情を高めてあげれば、子供は育つようにできている』教育に長年携わってこられた牛島先生の言葉は明瞭かつ簡潔なものでした。

不登校の子供に低体温が多いということ、彼らの健康のために、まず体温を上げるという話には驚かされました。

そもそも、生まれたときには皆平等に本能性体温という36度台の体温を持っているのが、成長するにつれ、主に生活習慣の乱れによって、低体温の子供の割合が増えているのが現状ということでした。

そこで、低体温化傾向の克服のために必要なことが睡眠と食の改善です。

具体的には、

- 睡眠の質が良いといわれる『22時から4時』、『真っ暗な状態』を条件に、年代によって必要な睡眠時間をとる。
- 食事は本物（自然）の調味料をベースに、一日三度の食事で、海のものや野菜をとる。
- 朝食抜きなどの欠食や、清涼飲料水やインスタントラーメンを食することはなるべくしない。
- 適度な運動と、電子機器に依存しない生活を送る

今回の講演を通して、それは牛島先生のお人柄なのでしょう、これまで個人的に育児論を読み聞きした時によくあった、正論で責められ追いつめられるような感覚ではなくて、シンプルなことだから愛情を持って実践していきなさい、という導きをいただいたように感じられました。

子育てしていると、わかってはいるけれどついついということになってしまいがちですが、今回牛島先生に教えていただいたことを、家族の心身の健康のために、ぜひ継続して実践していきたいと思います。

（※室見幼稚園保護者）

主任研修会

「心をたがやす保育 ～言葉の力を育てる～」

講師：徳永　満理 氏

日時：平成26(2014)年
1月15日(水)15:30～
場所：私立幼稚園教育センター
出席：41園　45名

1．幼稚園教育要項の領域「言葉」に示されている絵本の読み聞かせで育つもの

①大人との関係性をはぐくむ
読み聞かせの場合、読み手は怒ってではなく、優しく話しかける様に、あやすように読む。

②大人の読む息づかいを感じながら、ともに生きる喜びと希望を育む
7ヶ月の赤ちゃん…拍子をとったり手を止めたりと合図を行う。

③想像力を育む
・大人に読んでもらうことで、ことばの持つ力が伝わり、絵の中のことばを読み解く楽しさがふくらむ。
・絵を読む力…ゆっくり読む。絵をゆっくり見せる

④物語力を育む
絵本は「見る力」を育てる。発想の転換。楽天性。

⑤豊かな人生への「扉」を開く
・絵本には、メッセージがある。保護者はそのメッセージをどうやって伝えていくのか。ただ読むだけではだめ。その月齢の子どもの心の中に、どう落としていくのかが大切である。
・幼年文学に出会わせる→保育の中心
・聞く力が見る力を育てる。

よく聞く→よく見る→みんなに伝えようとする→言葉にする→「なんでだろう」が考える力を育てる。概念を育てる。

2．ことばで考える力を育てる

・つぶやきはことばで考える力の始まり
・「つぶやき」…内言を育てる一歩手前。言葉の発達。思いが視線やしぐさで表現されている。→段々言葉へと変わっていく。

3．イメージの形成と思考力の広がり、そこにあった絵本選び

①１歳前後から始まる指さしは、理解言語の始まり
・乳児期の指さしは、言葉の始まり
・可逆の指さし（大人の質問に答えられる）
・保育者は、指さしが出てくるような読み聞かせをする。

②ことばと対象物が対応し、ことばの数が増えてくる（２歳ごろ）
象徴機能成立とイメージの形成。みたて、つもりの膨らみ。

③話しことばが増え、体験をことばにして話すようになる（３歳ごろ）
・伝達機能の成立
・ごっこ遊びが、遊びの中心になってくる。劇遊び。

④日常会話の成立と内言がはじまる（４歳ごろ）
・思考機能の成立。現実と虚構世界の切り離しが始まる。切り離しができる様になると、物語が楽しめるようになる。
・読み聞かせの時、子どもが静かに聞いているから楽しんでいるとは限らない。没頭できているのか見極めるのが大切

⑤自己形成と自己の発見が始まる（５歳ごろ）
・５歳児の自己調整力。言葉の機能の最も高いところ。

絵本は、「最後まで聞く」は基本だが、子どもの発見で「ちょっと待って」と前に戻ることができる。
生きる力とは、自分の心の中に物語を作ること。人は物語という形をとってさまざまな経験を行う。　（※広報委員）

統合保育研修会

「落ち着きがない子、不器用な子 ～感覚の発達から見えてくるもの～」

講師：東部療育センター 作業療法士 坂中　裕子 氏

日時：平成25(2013)年
11月7日(木)15:30～
場所：私立幼稚園教育センター
出席：31園　88名

集団保育の中で、保育者が感じる〝子どもの気になる行動や子ども自身の困り感〟について、感覚の発達という側面からお話しをしていただきました。私自身、今までも子どもの行動にはどのような理由があるのかを考えながら保育を行っていましたが、今回子どもを見る具体的な視点や子どもの行動を理解するためには、原因や背景を推測し、困っている子どもの気持ちに寄り添った対応を工夫していくことが大切だということを改めて学びました。

気になる行動の背景の一つとして、感覚の偏りや感覚統合（感覚の整理）の弱さがあると言われており、感覚には、触覚やバランス感覚、「固有覚」があるそうです。研修の中では、「固有覚」というものがどのようなものなのかを体験しました。まず目を瞑って、自分の鼻や耳を触ってみました。次に2人組になり、1人が目を瞑ります。もう1人は目を瞑った人に手のひらを向けます。目を瞑った人が自分の鼻と相手の手のひらを人指し指で交互に触るということを繰り返しました。多くの人が目を瞑ったままでも、自分の鼻と相手の手を触ることができました。このように、「固有覚」とは、自分の身体がどのような位置関係にあるのか、身体の各部分にどれくらい力が入っているのかということを感知することだそうです。この感覚の偏りによって、様々な行動が現れてくるそうです。

触覚や固有覚が過剰に反応することにより、抱きつかれることや特定の生地の洋服を着ることを嫌がったり、バランス感覚の鈍さにより、多動が見られたりするということでした。私達が当たり前に過ごしている環境の中でも子どもにとっては、感覚の偏りにより過ごしにくい環境になっているということが分かりました。

子どもと過ごす中で、一つひとつの行動をどう考え、行動が起こった理由やどんな対応をするのかを具体的に考えて、子どもの気持ちに寄り添っていくことが大切なのだと感じました。また、気になる行動だけに目を向けるのではなく、その子の好きなことや得意なことを伸ばし、様々な視点から子どもの個性を受け止めながら、日々子どもたちと過ごしていきたいと思います。

（中村学園大学付属あさひ幼稚園　教諭　荒木　恵美）

新規 第6回 採用教師研修会

日時：平成26（2014）年2月12日（水）
15:30〜17:00
場所：私立幼稚園教育センター
出席：51園　83名

今回の内容は、「体験発表と経験交流」ということで、1年間の反省と感想を出し合い、各園での体験とこれまでの学びを深め合いました。

【新任研修を終えて】

2013年4月2日、初めての新任研修が行われました。保育者としても社会人としても一年目で、とても緊張していたことを昨日のことのように覚えています。あの日からもう一年が過ぎたのだと思うと、本当にあっという間だったと感じています。先日、最後の新任研修として、共に一年間研修を受けてきた新任の先生方との交流会が行われました。一人ずつこの一年間を振り返り、嬉しかったことや感動したこと、悩んだこと、落ち込んだことなど様々な体験発表がありました。同じ一年目の先生のお話を伺い、自分の経験と重なる部分も多々あり、気持ちを分かち合うことができてとても嬉しかったです。

新任研修では、一年間を通して、多くの講師の先生方にお話しをしていただきました。保育者としての第一歩を踏み出した私達にとって、優しく、そして力強い先生方のお言葉はとても心に響きました。私は、保育の中で失敗してしまったり、つまずいてしまったりしたときに新任研修でいただいたお言葉を思い出すという場面が何度もありました。交流会の中でもこれまでの研修での学びを力に変えてきたというお話がいくつもありました。新任研修での学びが私達にたくさんの勇気を与えてくださっていたことを改めて感じました。いつまでも初心を忘れず、日々成長していきたいです。

（大濠聖母幼稚園教諭　中村　紗織）

1年目を振り返って―

照葉幼稚園　教諭　安部　美里
西南学院大学　人間科学部　児童教育学科　卒業

幼稚園教諭として働き始めて、1年が過ぎようとしています。私はとにかく昔から子どもが大好きで、将来は子どもと関わる仕事がしたいといつも思っていました。その為高校卒業後の進路は幼児教育科を選択し、大学在学中の実習でいつも笑顔で子どもと触れ合う先生方の姿に憧れ、幼稚園に就職することを決めました。そして幸いなことに今の幼稚園で採用して頂き、周りの先生方に助けてもらいながら日々を送っています。夢であった仕事に就くことが出来ましたが、現実は厳しく、幼稚園教諭として働く中で自信をなくし、子どもたちの前に立つことが怖いと感じることや、社会人としてまだまだ未熟で周りの先生方や保護者の方にも迷惑を掛けてしまうことが多々あります。そんな私を丁寧に指導してくださっている先生方には本当に感謝しています。未だに保育者として頼りない私ですが、子どもたちは「先生！」と駆け寄って来てくれ、毎日笑顔に囲まれて仕事が出来ることをとても嬉しく思います。縄跳びや雲梯など、どんどん出来るようになっていく姿や、なかなかお友だちと関わることが難しかった子が集団で楽しそうに遊ぶ姿、人前に立つのが苦手な子が大きな声で発表している姿…など、毎日の生活の中で沢山の成長を見ることが出来ます。今まで実習などで短期間子どもと関わる機会は何度かありましたが、1年を通して同じ子どもたちと過ごす経験は初めてだったので、子どもはこのように変化し、成長していくのだと間近で感じることが出来、とても勉強になった1年間でした。来年度は2年目になるので、社会人としてしっかり一人前になり、そして一人一人の子どもともっと深く関わり、それぞれに合った保育が出来る保育者になれるよう努めていきたいです。

5年目を振り返って―

柏原幼稚園　教諭　奥村　絵美
京都女子大学短期大学部　初等教育学科　卒業

私は高校卒業と同時に地元福岡を離れ、京都へ進学し、卒業後は幼稚園教諭として京都の幼稚園に4年間勤めました。

その後、もっといろんな世界を見て視野を広げたいと思い1年間カナダにワーキングホリディのビザで滞在し、様々な経験を積み、帰国後、地元福岡で新たに新任教諭としての1年目を過ごしています。

4年間の経験があることや海外の生活を経験したことで、自信をもって新しい職場に勤めましたが、勤めてからしばらく経ち、前の職場とは違う仕事内容や仕事の進め方についていけず自信をなくしたこともありました。復帰した時はバリバリと働く自分を想像していたのですが、新学期がはじまってすぐ「これで良いのだろうか」と常に不安な気持ちをかかえるようになりました。疑問点があっても、自分からはなかなか質問できなかったり、年下の先輩に頼ってよいものか、それとも自分でしっかりしていかなければいけないものなのかと葛藤し、何とかしないと…と気ばかりが焦り、結果的に周りに迷惑をかける大きな失敗をしたこともあります。表情も日に日に暗く、頼りなくなってきていたと思います。しかし、そんな私に気付き「何かあった？」「悩んでることがある？」と声を掛けて、いつでも相談に乗って下さる先生方がいたことが本当に救いでした。

今までの教諭生活の中で残念ながら途中で辞めてしまう先生の姿も見てきました。採用試験を乗り越え、やっと手に入れた「幼稚園の先生」という仕事の理想と現実のギャップについていけず、早々の決断をしたのでしょうが、教諭としての楽しみ・やりがいを感じないままの退職は本当にもったいないことだと思います。

有り難いことに私には救いの手を差しのべてくれる「職員」という仲間がいました。私自身もたくさんの先生方の助けを借りながら年少児のクラス担任として勤めています。今回、新規採用教師研修を受けることで、同じ悩みや不安をかかえた仲間と知り会えたこと、もう一度仕事への姿勢や人との接し方・マナー等を1から改めて学ばせていただいたことは、私の新たな職場での活力となりました。

これから教諭生活6年目、今の職場での2年目を迎えますが、いつまでも謙虚な姿勢で仕事と正面から向き合い、子ども達と一緒に成長し続けられる先生でいたいと思います。

●笹丘カトリック幼稚園　教諭　静　里歩

今回の研修は「対話」ベースの「感じあう研修」というもので、1グループ7名～8名で違う幼稚園の先生方と話をする貴重な場となりました。

一つ目のワークは、〝イメージマップによる対話〟です。まず各々で紙の中央に自分の勤務している幼稚園名を書き、その周りに幼稚園に関わる外部機関等を書き出しました。そしてグループで発表し合い、情報を共有しました。頭ではわかっているつもりでも書き出してみるとなかなか出てこなかったり、色々な方の話しを聞いてそれぞれの園の特色がわかったりと、とても興味深い対話となりました。頭の中にあるものを書き出すことで、沢山の外部機関によって支えられていることを再認識し、幼稚園の先生としての責務を全うしようという意識がさらに強くなりました。

二つ目のワークは、〝フォトラーニングによる対話〟です。保育の何気ない様子を収めた1枚の写真をもとに、その写真を通して子どもたちが何をしているように見えるか話し合いました。対話を通して、その人の体験や知識、価値観でとらえ方が多種多様で自分にはなかった考え方等も共有でき学び多い時間となりました。

今回の研修を通して、対話をすることによって価値観や色々な視点からの物の見方が広がり、様々な「子ども理解」の視点を共有することにつながりました。また、自らの保育を反省し振り返ること、「遊び」の意図やねらいを5領域の視点から考えること等、改めて専門職として子どもたちと関わっていることを意識しながらこれからの保育へと活かしていきたいと感じました。

対話で深める子どもの理解Ⅱ 応用編
～「組織的な保育力向上」のための ふりかえりの力を身につける～

講師：那須　信樹 氏
日時：平成26(2014)年 1月24日(木)15:30～
場所：私立幼稚園教育センター
出席：47園　83名

●松原幼稚園　教諭　冨永　千晴

【Work1】
イメージアップによる「対話」
組織的な保育力の向上に向けて

このWorkでは幼稚園内・外における人や関係機関との連携について考えた。その結果、自分の園と他の園との違いや特色を対話を通して共有することができた。

例えば私の園では体育教室、英語、年長のみの絵画教室がある。その他の園では造形があったり、バレーがあったり、茶道があったりと、それぞれの園の特色が表れていることが分かった。

また、幼稚園はその中で働く人のみならず、保育用品を届けて下さる業者さんや子ども達の豊かな育ちを支えて下さる地域の方々、写真を撮って下さるカメラやさんや田んぼを貸して下さる方々等、グループで対話を深めていくうちに、つながりはだんだん広がり、これらすべての人々との協力により、子ども達の育ちがあるのだと再認識できた。

【Work2】
フォトラーニングによる「対話」

次のWorkでは写真を参考に子ども達が今何をし、どんな気持ちであるかをイメージすると共にグループ内で対話し、さまざまな角度からそれを見ることができた。

ホースをもち、何か発見したような子ども達5人の1枚の写真。

私は近くにあったあさがおの水やりを終え、その中（ホースの）に残った水に気づいた子ども達がホースを押さえたり、離したりすることで動く、水の流れや動きを楽しんでいるように思えた。

自分だけだったら、そのように1点の角度からしか見えない写真も、対話し、他の人の意見をきくことで「こんな見方もあるんだな」と視野を広げることができた。

また、そのイメージから次に子ども達にどのような声かけをし、どんな学びにつなげるか話し合った時には、ホースに興味をもっていることから、ホースの中に何か小さいものを入れて、流れ出てくる期待にすることや、子ども達自身がこの次どうするか見守る等、様々な保育の方法が生まれた。

私たち保育者はいろいろな考え方の中で様々な方法の保育を行っている。しかし目的は一つである。幼稚園教育要項の五領域に基づくものである。子どもは子ども時代を生きる権利がある。

内容は様々であっても、子どもの成長のため、職員同士で対話を深め、意見を外に出し合うことはとても大切である。私も子どもたちのため、今やっていることの意味を見える形にしていきたい。

なるほど！

となりの園内研修!!

Vol. 3

高取幼稚園 究極の園内研修、ここに！？

連載『なるほど！となりの園内研修！！』のコーナーですが、今回で3回目を迎えております。

前2回も、それぞれに個性溢れる園内研修の実際をご紹介してきましたが、今回お邪魔した早良区の高取幼稚園（園長：渡辺公三先生/園長代理：渡辺和育先生）の園内研修への取組みは、まさに「究極」とでも呼ぶべき園内研修のあり様を示しているものかもしれません。では、なぜ「究極」と言えるのか･･･。

その全貌をここにご紹介しましょう。

賑やかな職員室

〝賑わう〟職員室!?

『なるほど！となりの園内研修!!』で取材をさせていただくときに必ず目にとまるのが、各園の中枢機能となっている職員室の様子です。前回ご紹介した貝塚幼稚園（東区：庄司誠園長）では、クラス担任ごとにデスクトップパソコンが準備され、IT化のもとに実に〝スッキリ〟とした環境において展開されていた園内研修や職員会議の実際でした。

しかしながら、今回お邪魔した高取幼稚園の職員室は（渡辺先生、スタッフのみなさんゴメンナサイ!!）、どちらかといえば〝ギッシリ〟感満載の職員室でした（笑）。ただ、とりわけギッシリ感満載だったのが渡辺園長の執務コーナーで、プラモデルをはじめとする様々なモノに囲まれながらのお仕事は、きっと子どもたちの日常の園生活を豊かなものにしていく上で必要な創造性発揮のための環境なのだろうと感じた次第です。

このように環境面でも賑やかな高取幼稚園ですが、職員室で仕事をされている先生方のまた賑やかなこと賑やかなこと！職員室のこちら側では同学年担当者同士で一日の保育の振り返りが行われていたり、明日の保育に向けた打ち合わせが行われていたり、あちら側では談笑とともにチョキチョキとはさみの音が聞こえたりと、職員室内は元気な音に包まれているのでした。

〝賑やかさ〟を支える背景にあるもの

毎回の取材で行っているように、今回の取材でも渡辺園長にお尋ねしたのは、年間に行われる園内研修の回数や内容、構成メンバー（園長・主任などの管理職を含めたメンバー構成になっているのか、それとも管理職を除いた構成になっているのか）や園独自の工夫などについてでした。ところが、渡辺園長からの答えは「う～ん、特に決めていない」というもの。

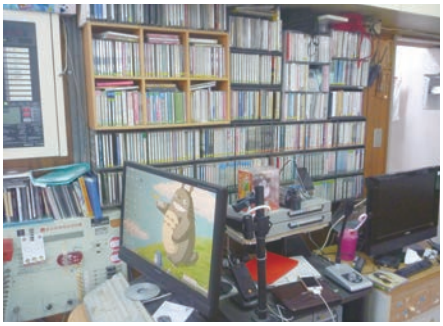
さらに「特に決めていない」とされるその理由をお尋ねすると、「園内での研修で大切なのは、職員の抱えている問題意識や目的であって、職員の研修や会議の持ち方、中身については、極力職員の主体性に任せている」とのこと。また、職員の主体性に任せるためにも「日常的な職員との信頼関係づくりが大切」だということにも言及されました。渡辺園長の持論は続きます。「見落とされがちなことだけど、先生こそが環境であり、子どもたちの個性が尊重されるように、先生たちの個性も尊重されなくてはいけない」とのこと。これは「保育の質そのものにもかかわる問題」で、幼稚園で働く先生たち一人ひとりに「自信を持ってもらいたい」「自分の可能性を信じてもらいたい」という願いがあるからとのことでした。

それぞれの言葉の裏には、園の先生たちに「いかに成長してもらうか」を支えるのが園長の仕事だとされる渡辺園長のマネッジメント方針が貫かれているように感じられました。なるほど、高取幼稚園の先生方の〝賑やかさ〟には、こうした園長の思いによって形作られている面もあるのだなということが分かったような気がしました。

対話の時間を生み出すためのIT化とその功罪

貝塚幼稚園の庄司園長も同様のことをお話しされていましたが、最近、多くの幼稚園で業務の効率化のためにパソコンをはじめとするデジタル機器や園運営をアシストしてくれるプログラムの導入が相次いでいるようです。

高取幼稚園も同様で、保護者を対象とした「連絡メールシステム」や保育教材製作場面において活用される「クラフトロボ」などが導入されていました。また圧巻は、音楽スタジオを髣髴とさせるような音楽・映像編集コーナーで、年間を通じた様々な行事場面で使用される楽曲や映像の編集が行われているとのことでした。



なるほど！

となりの園内研修!!

Vol. 3

よく笑い、よく語り合う先生たち

園長の話によれば、「いずれも業務の効率化を図るために必要な取組みであり、効率化によって得られた時間を先生たちがいろいろなことを話し合ったり、確認し合ったりする時間に使ってもらえればいい」とのこと。さらに、「時間があれば、いろいろなアイディアを生み出すことにもつながる」とIT化による職員間の対話の充実とアイディア創出への期待についても教えていただきました。

一方、IT化によるデメリットについて、「便利になればなるほど時間を食われてしまう可能性もある」との指摘がありました。例えば、「機器操作習熟のために時間を取りすぎたり、あれもこれもとデジタルベースで考えてしまうと、その便利さゆえにあれもこれもまたやりたくなってしまい、結果的にすべてが回らなくなってしまう面もある」との指摘でしたが、「ご指摘の通り」のことを普段からしている筆者にとっては耳の痛くなるような内容でした。渡辺園長、続けてこうも語られました。「IT化は必要だけど、遊び心で付き合わないと長続きしない。それから、導入したことで生まれた時間を何に使うかが大切なことなんだよね」と。

究極たる所以とは

結論から言えば、究極の園内研修に必要な条件は「園長をはじめとする全教職員の信頼関係に基づく日常的な対話（コミュニケーション）の充実にあり」ということでしょうか。「そんなの当たり前」と思われるかもしれませんが、その「当たり前」のことができにくくなっている園も多くなってきているのではないでしょうか。

何より今回の取材を通して驚いたのは、年間を通じて計画的に園内研修を実施されているのではなく、いつでも必要な時に、必要なメンバーがさっと集まって対話がなされている、結果的に、わざわざ園内研修日を設定するまでもなく、教職員間の課題の共有や外部研修会に関する情報の共有が自然に行われているというものでした。ただ、こうした時間を確保するための取組みは、やはり管理職の先生方の意識一つにかかってくることであり、まさに教職員の対話が日常的にできにくい状況そのものに保育実践の場が抱える大きな問題があるようにも感じました。

保育実践の場において人材難が顕在化してきている状況の中で、教職員と管理職の信頼関係構築にはもっともっと関心の目が向けられなければならないと思います。ここをうまくやっていきませんと、園内研修の充実どころの騒ぎではなくなってくるのと思われるからです。

まさに、各園の管理職の先生方と教職員の先生方がいかに協働的、かつ組織的に保育実践に取り組まれようとするのか、そこに自ずと「対話」が生まれ、自ずと「動き」が出てくるのではないでしょうか。ご紹介してきたように、高取幼稚園さんも、何か特別な取組みをされているわけではありません。ただただ、「日常的な対話」を紡ぎだしながら園長先生はじめ、教職員全員が一丸となって保育実践に取り組んでいらっしゃる、その積み重ねが冒頭に触れたこの園独特の〝賑やかさ〟となって現れていたように感じてなりません。そしてその先に、これまた結果としての「日常的な対話」という園内研修が行われているという、まさに究極の園内研修の実態を教えていただくことができました。

最後にもう一つだけ紹介しておきたいこと。それは、賑やかな職員室の中にあって〝安らぎ〟を演出しているワンちゃん（柴犬）の存在です。職員室の真ん中の机に置かれたかごの中から、よく笑い、よく語り合い、またよくしゃべりあう先生たちの姿をじ～っと見つめている（もしくは眠っている）だけなのですが、その両者ともがゆるぎのない安心感に包まれているのが伝わってくるのです。しつこいようですが、「この園の職員室、〝賑やか〟になるはずだ…」と納得させられた今回の取材でした。

高取幼稚園の渡辺園長先生はじめ先生方、そしてワンちゃん、究極の園内研修のための全教職員協働による〝賑やかな〟雰囲気作りの大切さを教えてくださって本当に有り難うございました。これからも全教職員一丸となって、究極の〝賑やかさ〟を追究し続けてくださいね！

（※広報委員）

先生たちを癒してくれるワンちゃん